

後輩たちへのエール！ その37

2020年6月2日

「やりたいこと」に積極的に！ 「考動力」で未来を拓く

◇今回は、上野雄也さん（自動車メーカー勤務）の活動報告です！

■ はじめに

皆さん、初めまして。私は2012年度卒の上野雄也と申します。関高校を卒業後、芝浦工業大学工学部機械工学科に進学し、2016年度に卒業しました。翌2017年度より自動車メーカーに入社し、2020年度の現在、4年目を迎えております。この度、本稿執筆の機会を頂きましたので、この機会に今一度自身の高校時代から現在に至るまでを振り返り、今思うことを記すことで、皆さんの将来設計に対する何らかのヒントとなれば幸いです。

■ 高校時代 ～受験失敗で芽生えた学歴コンプレックス～

私は、受験で大失敗しています。大前提の志望校・学科の選択については、物心付いた頃からずっとクルマが好きで、将来は自動車メーカーでエンジニアになりたいと思っていたので、工学部機械工学科の一択で迷いはありませんでした。ですが、肝心の受験勉強に関しては、部活の引退時期が早かったこともあり、当初は切り替えが出来ず、いまひとつ打ち込めていませんでした。その後、周りにつられて勉強は進めていきましたが、結果は伸びず、模試をやっても志望校の判定は変わらず、受験勉強に対して自分なりの正攻法みたいなものも見出せない状況が続いていました。そのまま受験本番を迎え、センター試験は大失敗。国公立の志望校も下げざるを得ませんでした。そして、国公立の前期試験も不合格となり、かろうじて合格していた芝浦工業大学工学部機械工学科に進学したというのが私の受験生活です。正直、この頃から学歴コンプレックスみたいなものが芽生え始めていたと思います。

■ 大学時代前半 ～良き仲間との出会いと様々な体験・経験と～

入学当初、私はどこかに学歴コンプレックスを抱え、大学院での他大学への進学を視野に入れていました。そんな中出会った友人たちも、受験失敗を経て同じ大学に入学しており、私と同じような考えを持っていたのではないかと思います。やがて意気投合し、一緒に行動するようになりました。

大学での講義が始まると、その内容に面食らったことを覚えています。入学当初の基礎科目だった物理学の講義レベルが非常に高かったのです。講義の進行スピードも速く、毎週膨大なレポート課題を与えられていました。当時、大学入学したらバイトして遊んで彼女作って講義はほどほどにというような生活を思い描いていましたが、その夢は早くも打ち砕かれてしまい、大学は勉強するところなのだと思います。この時から、友人たちと教え合い、助け合いながらこうした講義や課題を乗り越えて行くようになりました。機械製図や実験レポートを徹夜でやり切り、製図用紙・レポート用紙と添い寝して朝を迎えたことも懐かしい思い出です。入学時点でのこの経験により、大学でも真面目に勉強する習慣付けが出来たことが良かったと思います。みんなで助け合ったからこそ乗り越えられたと思いますし、切磋琢磨できる友人と出会えたことは私にとっての財産です。中は同じ会社に入社した仲間もあり、生涯の友人と呼べる存在に出会えたと思います。



盟友と呼べる大学の友人との卒業旅行での1枚

一方で、課外活動にも精力的に取り組みました。グローバルに活躍できるエンジニアになりたいという夢は変わらず持っていたので、英語の勉強にも力を入れました。学内の語学学習プログラムを積極的に活用し、2年次には海外語学研修プログラムに参加し、アメリカ・カリフォルニア州での1ヶ月間の短期語学留学を経験しました。こうした経験を通して、英語運用能力を高めるとともに、ホームステイ・現地での生活を通して多様な文化に触れ、自身の視野を広げることが出来ました。



海外語学研修にて、ホストファミリーとの1枚

ここまで学業の側面で話をして参りましたが、アルバイトの経験も、私の人格形成に影響した要素だと実感しています。言うなれば、アルバイト経験のおかげで“良い感じに砕けた人間になれた”と思っています。私は個人経営の居酒屋と大型スポーツ専門店での接客業務を経験しましたが、バイト先の社員の方やお客様など、自分とバックグラウンドの異なる相手の関わり合いの中で培ったコミュニケーション能力については、社会人になった現在にも生きていていると思います。

■ 大学時代後半 ～学部卒での就職を決めた経緯～

それは、3年に進級する前の春休みに帰省した時のことでした。父親から、「このまま今の大学・大学院を卒業して、夢である自動車メーカーに本当に就職できるのか？」と言われたのです。父親の中にも、大手メーカーに就職するためには大学のレベルも必要だという認識があったからこそその言葉だったのではないかと思います。この言葉に対して、当時の私は何も言い返すことが出来ませんでした。

それから大学に戻った後、学科の就職掲示板に掲載されていた、現在働いている会社のインターンシップ募集の貼り紙を見つけました。当時、実際のエンジニアリングの現場でどのように仕事が進められているのか全く分かっていなかったのも、まずは応募してみようと思いました。いざエントリーシートを起票してみると、専攻や取り組んでいる研究内容を記入する欄がありました。当時、研究室配属もされていなければ、ゼミすら始まっていなかった私にとって、理系のインターンシップは大学院1年次での参加が前提であることを改めて実感したことを覚えています。そんな状態での応募でしたので、応募時はダメでもともと、エントリーシートも通過できないと思っていました。ですが、その後エントリーシートが通過し、面接の案内が来ました。当時、染めたばかりの茶髪を急遽黒髪に戻し、就活カバンも用意してなかったのも、とりあえず黒のリュックサックで面接会場に行ったことを覚えています。選考は6人の集団面接でしたが、周りは皆大学院生であり、リュックサックの学部生は相当異質な存在に映ったに違いありません。ですが、その異質さが功を奏したのではないかと考えています。面接は1人あたり10分ほどで、順に面接官からの質問に答えていく形式でしたが、他のどの学生も、自身の専攻・研究内容について説明していました。その中で、私の順番が回って来た際、質問の焦点となったのは『なぜ学部生でインターンシップに参加しようとしたのか？』という点についてでした。まだ専門もない中“だからこそ”インターンシップに参加し、身をもってエンジニアとして求められる資質を学び、将来の自身のエンジニア像を明確なものにしたいという旨をアピールしました。そして、面接に通過することが出来ました。

インターンシップでは、1ヶ月程の期間で配属部署での実業務に基づくテーマを与えられ、検討・報告までを実施しました。これまで学んできた基礎工学がどのように自動車工学へと繋がるのかを知るとともに、使ったことのない計測機器やデータ解析ソフトに触れられたことは非常に新鮮でした。また、エンジニアとしての仮説・検証といった仕事の進め方や、仕事を進める上で求められる能力を体験的に学ぶことが出来ました。その経験を通して、エンジニアリングの現場で求められているのは、就職時点での専門性や知識、さらに言えば学歴ではなく、自身の知的好奇心を原動力に、意欲的に学び、吸収していく姿勢なのではないかと思うようになりました。これこそが、一般的に、理系の学生が技術職に就職する上では大学



インターンシップ終了後の懇親会での1枚

院への進学が前提とされている中で、私が学部卒での就職を決めた決定的な要因であるとともに、このインターンシップの一連の経緯を通して、私の中での学歴コンプレックスは消えていったと思います。

■ 社会人になって ～今思うこと～

最後に、社会人となった今、私自身が思うことを述べたいと思います。

まずは、学生時代の過ごし方について。どんな風にもでも過ごせる期間だからこそ、自分がどうしたいかを考え、発信・行動する「考動力」が重要になると思います。私自身、3年次でのインターンシップの参加についても、そのタイミングで自ら情報を集め、行動を起こしたからこそ、夢の実現への扉を開くことが出来たのではないかと考えています。だからこそ、学生時代のうちに、自身のやりたいことを積極的に発信し、それに挑戦することが大事だと思っています。そうすることで、まずはやりたいことを実現することができ、その経験によって自身の成長や、視野の拡大へと繋げられるのではないかと考えています。そして、この「考動力」は、社会人になっても求められると思います。入社後数年間は、仕事の「型」を体得する時期ではありましたが、それ以降は、能動的に自ら「どうしたいか」を発信していくことで、少しずつ裁量を与えてもらいながら仕事を進められるようになってきたことを実感しています。

次に、社会人生活について。入社後、学生時代の専攻がそのまま仕事になることは稀であると考えたほうが良いと思います。私自身、大学での研究は今の仕事にはなっていません。まずは与えられた環境下において、自身の業務を遂行するために、常に謙虚に学び続ける姿勢が大切であるというのが今の私の認識です。また、組織の中で必要な存在となるためにも、自身の専門領域を拡大し、「多能個」としてのレベルを高めるべく、社会人になっても勉強の継続は必要であると思っています。私自身も道半ばですので、今後とも勉強を続けていく所存です。



新入社員研修時、地元での販売店実習中の1枚